
碧の宮

亞湮那

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碧の宮

【Nコード】

N7569Y

【作者名】

亞湮那

【あらすじ】

毎日に嫌気が差していた女子高生、椎香。

ある日いきなり異世界「碧の宮」へと連れて来られ、同じように連れて来られた8人と共に、世界を救うため力を貸してほしいと頼まれる。

碧の宮は正体不明のウイルスに汚染されており、今のところ対策は異世界から来た椎香たちにウイルスを除去してもらうことのみ。
今のままでは碧の宮はウイルスによって滅ぼされ、それは椎香たちの住む世界すべての滅亡にもつながるのだという。

頼んできたのは自分にそっくりな顔をした少女。

それぞれまったく別の世界から碧の宮へ連れて来られた仲間たち

剣術少年・気が強い少女・王様親子・幼い双子・魔法使い見習い・
冷静な医者と共に、言われるがままに旅に出る。

敵に襲われるし、喧嘩はするし、任務は重いし、なぜ自分たちが選ばれたのかもわからない。

そもそも、椎香は他の仲間たちとは違って敵と戦う能力など微塵もない。

だけど、なぜか投げ出せない。

サイトに連載中の小説です。多くの人の感想がほしいという欲が出たためこちらにも投稿する事にしました。

第1話 それはいきなり起こった

私は、求めてた。探してた。欲しかった。

私を必要としてくれる存在を。

第1話 それはいきなり起こった

「ただいま……。」

返事が無いことが分かっていても、ついその言葉を口に出してしま
う。

大川…ではなく笠井椎香、高校1年生。両親の離婚で東京から遠い
山裾の田舎町に引っ越して1ヶ月。

自分の意思と全く関係なく始まった新しい生活に、彼女はすっかり
嫌気が指していた。

学校が家から遠いうえ通学路にはバスも電車も通っていない、大嫌
いな虫はどこにでもいる。

クラスメートにはなじめず友達も出来ない。東京でよく出かけたよ
うなショッピングセンターやカラオケもない…等、この町の欠点は
次から次へと出てくる。

「あーあ、つまんない。」

椎香はパソコンの電源をつけ、起動するまでの間にセーラー服を脱

いで部屋着に着替えた。

「ラッキー、新しい話更新されてる。ホームページの管理人さん、旅行から帰って来てたんだ。」

インターネット上の小説を読むのは、彼女の数少ない楽しみのひとつ。

左端の“お気に入り”から今一番ハマっている長編小説を載せているホームページのサイト名をクリックし、この日初めて彼女は笑顔になった。

東京にいたころは放課後も休日も友達と遊ぶ、流行のファッションや芸能人をチェックするなど趣味が多かったが、今はほとんど家で過ごしている。

長編小説の主人公は普通の女子高生だが、ある日彼女が一番気に入っている漫画の中の世界へトリップしてしまい、戻る方法を探しながらもなんだかんだで楽しく過ごすというストーリー。

「あーあ、いいなー。東京帰れないなら私もこの子みたいに別の世界に行けたらいいのに。今の暮らしより絶対楽しそう。」

寝て起きたら違う世界にいた　というミラクルは実際無いわけで、今日も椎香はいつも通り30分以上歩いて学校に行く。

道の両側は木が茂っていて、勢いよく鳴くセミが彼女の不快指数をどんどん上げていく。

東京の友達は「田舎は東京より涼しいよ。」と言っていたが、ここは盆地だからかむしろ東京より暑い。

紫外線を避けるため日傘を差して登校していたら、同じ学校の制服

を着てる女子三人からじろじろ見られていることに気が付いた。
前の学校では日傘を指して登校する女子は珍しくなかったが、こ
こでは状況が違っているようだ。

目を合わさず、視線を避けるため早歩きで三人組を追い越す。

ちよつとした違和感や不快感が積み重なり、すでに椎香は自分の現
状への不満が最高潮。

気付けば本気でどこか違う世界へトリップしたい、なんて考え始め
ていた。気に入らないことは考えないのが一番と、椎香はトリップ
の想像を続けることにした。

…… そうだなー、出来れば年中秋の世界で、楽しいこといっぱい
…… あ、イケメンは必須項目よね。

それで…… 誰でもいいから私を必要としてくれる人がいる、そん
な世界。

「…………… あれ？」

ふつと我に返って周りを見回す。明らかな異変に気が付いた。
周りを歩いているはずの人たちが、“歩いているようなポーズ”で
止まっている。さっきの三人組も同じ状態動いているのは椎香だけ。

「やだ…… 何これ。怪談？ 都市伝説とか、そういう系？」

一気に怖くなり、夢中で走り出した。誰か普通に動いている人間を
見つけるため、必死であたりを見る。

だが、目に入るものは異変ばかり。青信号なのに車も停まったまま。
セミの声もそういえば聞こえない。

「……何、これ。」

立ち止まり、腕時計を確認した。秒針は止まっている。

「何の冗談……。」

確信した。なぜかは分らないが、とにかく今時間が止まっている。椎香を除いて。

『……か、椎香。』

どこからか椎香の名前を呼ぶ声がした。訝りながらも返事をする。

「……何？」

『いきなり申し訳ありません。私は紫杏、詳しい説明は後程致します。碧の宮へいらして下さい。』

「……は？」

声がやんだ次の瞬間、ふわっと体が浮いたような気がした。そして次の瞬間。

「……！！？？」

急に襲ってきたジェットコースターに似た感覚に、椎香は思わず目をつぶった。

10秒だったのか10分だったのか……どれくらいの時間“急降下”していたのかは分からないが、その感覚が止まるのも突然だった。

「きゃっ！」

「ぐえっ！」

どしん！ という音と二人分の声、わずかなお尻の痛みとともに。

「おい、のいてくれ！ 痛い！」

「えっ。」

椎香が声の方 自分の下を見ると、人の上に落ちたという事実に気が付いた。

「わ、ごめんなさい。」

慌てて退いてからよく見ると、その人は椎香と同年くらいの男の子で……少し変わった格好をしている。

「なあ、あんた。ひょっとしてあんたも“紫杏”ってヤツの声、聞こえたのか？」

「も……って事は、あんたも？」

確かにさっきのよく分からない声の主は、自分の事を“紫杏”と名乗っていた。

「おう……随分変わった服だな。そんな服、オレ初めて見たぞ。」

変わった服と少年はいうが、通学途中だった椎香が着ているのは当然普通のセーラー服。

「あんだこそ、変わった格好じゃん。何だかRPGの主人公みたい。」

戦士のようにも見えるが若干古臭い服、腰には剣のような長いもの。ゲーム序盤の主人公のようだという例えはなかなか合っている。

「ろーるプレイングゲーム？　なんだそれ。」

二人の話はいまひとつかみ合わない。必然的に沈黙が訪れる。

「ひあっ！」

「ひゃっ！」

「ぐえっ！！！」

沈黙を破ったのは、また違う人間。子供が二人、再び少年の上に落ちてきた。

「わあ、溜々。人踏んでるよ、ボクラ。」

「きゃ、本当！　早くのかないと、露々。」

「おにーさん、ごめんなさい！」

二人は顔も声もそっくりで、双子だろうかとたやすく予想できる。

「あ、いや……あんだ達も、あれか？ “紫杏”に呼ばれたのか？」

「はい、そーです。」

「おにーさんとおねーさんもですか？」

「そうみたいなの。何なんだろうね……。」

四人で話していると、急に小さい二人のうち露々と呼ばれていた方がもう一人 瑠々の手を引き、後ろにざっと下がった。

椎香も少年も二人の行動の意味が分からず、「何？」と思った次の瞬間。

「うわっ！」

「っ！」

また別の人が落ちてきた。今度は椎香よりもいくらか年上だと思われる青年に、彼とそっくりな小学生くらいの少年。

「な、何が起こったんだ？ なあ、ここどこだよ！」

落ちてきた少年の方は戸惑いを全く隠さず椎香たちを見つけ聞いてくるが、答えられる人間がいるはずもない。

どこかから落ちてきた人間はこれで6人目。何が起こったのかなど全員が聞きたい。

「わっ！」

「きゃあっ！」

「痛てっ！」

また次、今度は三人がそれぞれ少し離れた場所に、ほぼ同じタイミングで落ちてきた。

「ちょっとー、何なのよ、これ！」

「ご、ごめんなさい！ 私にも分かりません！」

「いてて……ここは、これは一体……。」

混乱し続ける椎香たち、計9人。そしてその次は誰も落ちてこず、代わりに例の“紫杏”の聲が空から聞こえてきた。

『これでようやく、全員揃いました。手荒な真似をしてしまい、申し訳ありません。』

「あー、あんたさっきの！」

全員が声の方向を向き、最後に降ってきた内の一人、椎香と同じ位の年齢の少女がその方向に向かって叫んだ。

「どういう事？ ここはどこなのよ！」

『遅くなりましたが、今から説明致します。』

声が止んだ次の瞬間、何もない場所が急に光り出し、二人の少女が現れた。

「……え、あたし？」

椎香が無意識に呟くほど、その内の一人は彼女によく似ている。よく見たら髪型も違うし向こうは巫女服に似た服を着ている点でかなり違っているが、同じ格好をしたら双子のように見えるだろう。

「改めて自己紹介致します。私は紫杏、この碧の宮の巫女一家に仕える占い師です。」

最初に口を開いたのは椎香に似ていない方の少女。

「“碧の宮”とはここの事ですか？」

「ええ。そしてこちらが……。」

続いてもう一人の少女も口を開いた。

「私は雪路と申します。この地を治める“碧の巫女”の妹です。」

「碧の……巫女？」

「はい。皆様をこの場所へ導いたのは私たち二人です。皆様にお願いがございまして。」

「お願いって何なんだ？」

「碧の宮と皆様それぞれが生きてきた場所　世界全てを、救って下さい。」

第2話 まるでファンタジーのような展開

つまらない現実よりも、楽しそうな別世界に行きたい。

その願いが叶ったと思えないこともないが、実際来たら混乱するだけなのだ。椎香は知ることとなった。

第2話 まるでファンタジーのような展開

突然止まった世界、自分が落ちた“碧の宮”という場所、同じように落ちてきた人々、現れた二人の少女。

これだけたくさんの事がほぼ一度に起こって混乱しない人間がいなわけはなく、椎香もちろん例外ではない。

「世界を救うって、一体何なんだよ。」

「ええ、順を追って説明します、緋風。」

「えっ…俺の名前。」

「椎香、緋風、瑠々、露々、神冥、神詠、彪砂、羅歌、十和。」

自らを雪路と名乗る椎香に似た少女は、なぜか彼女の名前を知っている。

その他の名前は残り八人のそれだっただけ、全員が彼女と同じ驚きと疑問を感じていた。

「まず、此処と貴方方それぞれの世界の事からご説明致します。」

そう言い、雪路と紫杏は説明を始めた。

まず、椎香達9人はそれぞれ違う世界（ただし瑠々と露々、神冥と神詠はそれぞれ同じ世界）からここへ集められた。

そして違う世界と言っても、出身が“日本”なのはみんな同じらしい。

「みんな日本から来た……というのは？」

「平行世界……とえばいいのでしょうか。一つの地球にいくつもの別世界が存在しているのです。」

「つまり、俺がいた日本以外に、色んな日本　世界が存在するって訳か。」

そして、この碧の宮はいくつもの世界の中で唯一、他の世界の存在を知っていて、必要に応じて何らかの干渉をする事が出来る。

「“必要に応じた干渉”が、アタシ達をここに連れてきた事？」

彪砂が尋ねて、紫杏が頷いた。

「碧の宮は現在、窮地に立たされています。正体不明のウィルスが何処からか発生し、猛威を振るっているのです。」

そしてそのウイルスの猛威というのが、碧の宮に生息する人間以外の生き物に取り付いて凶暴的になる、ウイルス同士くっついて変な生き物になるなどして人間を襲い、碧の宮の人や町に甚大な被害が出てゐるらしい。

他にも奇病がはやった町や人々の心がすさみきって治安が乱れた町など、ウイルスの影響と疑われる事例も合わせて数えたら碧の宮全域にウイルスが何らかの形で潜んでいることになるという。

「このままでは碧の宮が滅びてしまいます。世界は全て繋がっている、それは貴方方の世界の終わりを意味するのです。」

真剣な雪路の表情と重い言葉に、九人の顔も固くなる。

「ウイルスは抗体か何かがあるのか、私達が退治や除去をしようとしてもびくともしません。私が占ったところ、碧の宮以外の世界に住んでいる人なら、ウイルスに打ち勝てると出ました。」

「……それで私達をここへ呼んだんですか？」

「はい。」

雪路が頷き、椎香達九人に頭を下げた。紫杏もそれに続く。

「お願いします、世界を救ってください！」

「ウイルス退治はきつと一筋縄ではいきません。危険もあるかもしれません。貴方方からしたら勝手な頼みでしょう。」

「それでも、どうしても貴方方でないといけないのです……！」

真剣な二人の様子に椎香達は文句も反論も出来ず、誰かが「分かった」と蚊の鳴くような声で呟いた。

「……なんか、厄介なコトになったわよねえ。」

「本当だよな。俺なんてまだ半信半疑だぜ。」

あの後すぐ、雪路と紫杏は姿を消した。

彼女達は遠く離れた王宮からテレパシーのようなもので椎香達と会話をしていたらしい。

長い時間話は出来ないから、詳しい話を聞くためと具体的な作戦を練るために王宮のある王宮都市まで来てほしい、とのことだった。

「まあ、とりあえず自己紹介でもしない？ このメンバーでしばらく一緒にウィルス退治の旅なんですよ？」

彪砂がメンバーを見回し、言った。

「そだな、じゃあ俺から。えーと、緋凧。16歳。特技は剣術……と、こんなモンか？ とにかくよろしくな！」

椎香より前に碧の宮に来ていた緋凧。ショートカットに動きやすそうな服、腰には剣。

加えて素直そうな顔立ちをしていて、やはり椎香の印象は“RPGの主人公風”。

「じゃあアタシね。彪砂よ。16歳で、特技は舞踊。元いた世界じや人気の踊り子だったんだから。」

緋風の隣に座っている彪砂はメッシュのように一部だけ髪の色が違って肩や腕や足を露出していて、椎香は“ギャルっぽい”と感じた。

話し方はハキハキしていて、きりつとした顔立ちから気の強そうな印象を受ける。

「次、あんたよ。」

彪砂が反対側の隣に座っている椎香に言った。

「……椎香です。私も16歳。特技……は何だろう、歌かな？」

椎香は中学時代、三年間合唱部に所属していた。高校に入ってから友達と毎週のようにカラオケへ行っていたが、引越し後はそれも出来なくなっている。

「元いた世界では高校生……えっと、学校教育受けてた。はい、次どーぞ。」

椎香は隣に座る男性に順番をまわした。

「神冥だ。年齢は19だが、元の世界では王をしている。」

ロングヘアに胴着のような格好が少しアンバランスな神冥はため息をつき、淡々と言った。

男前ではあるが怒ったようなその表情に、近づきたい印象を受ける。

そして隣に座る少年　表情と雰囲気以外は神冥をそのまま小さくしたような彼は、神冥とは対照的に元気よく自己紹介をした。

「俺は神詠、9歳！　神冥の子供で、次の王様だ！」

「……へ？」

神冥と神詠以外の全員がほぼ同じ反応をした。19歳の男性の息子が9歳など有り得ない現象だというのは、どの世界でも共通なのだろう。

「しんめーがしんえーのパパなの？」

双子の1人が尋ね、神詠が「おう！」とはっきり答えた。一方、隣の神冥は難しい顔をしている。

「ほら、次はあんだだよ。」

なにか訳ありの親子なのだろうと椎香は考える。他所の家の事情には首を突っ込まないでおくのが波風立てないコツだと、椎香は自己紹介の順番を双子達に回した。

「あ、うん。僕は露々、7歳。瑠々の弟！」

「あたしは瑠々、7歳。露々のお姉ちゃん！」

瑠々と露々は男女の双子なのに、顔も声も瓜二つ。違っているのは髪が長いか短いか、はいているのがズボンかスカートかぐらいだ。

「あ……羅歌、です。13歳で……家は代々続く魔法使いで、私は……まだ、見習いです。」

魔法使いというファンタジーな職業が現実存在する世界もあることに、内心椎香は関心を抱く。

美人だがおどおどした話し方で声も小さい羅歌は、気が弱く大人しい少女なのだと楽に想像できた。

「十和と申します。年は18歳、医者になるため学んでいます。」

眼鏡をかけ、チェックのワイシャツをさらっと着ている十和は真面目そうで、実際落ち着いた言葉遣いも丁寧。

「さて、と……全員自己紹介したよな。じっとしててもしょうがねえし、行こうぜ。」

「行こうって……どこに？」

「あそこになんか集落っぽいのあるじゃん。」

緋風が指差した方を全員が見る。どこまでも広がる草原の向こうに、確かに建物の集まりが見える。

「とりあえずあそこ行つて、王宮への行き方とか聞こうぜ。」

「うむ。」

「えー、ちょっと休憩してからにしない？ 疲れたしさ。」

緋風の意見に神冥が同意したが、彪砂は反対意見を唱える。

「でもさ、さつさ行ってさつさとウィルスの事片付ける方がよくないか？」

「俺も行きたいー！」

「えー、ちょっと…緋凧も神詠も疲れてないわけ！？ 椎香と羅歌はどうなのよ。」

「え、私？」

傍観していた（というより、話に入る隙がなかった）椎香と羅歌は急に話を振られ、驚く。

「あ、あの……私は……どちらでも……。」

「なによ、はつきり言えないの？」

気が弱い羅歌と気が強い彪砂という椎香の読みは間違っではないなかった。

「…私、彪砂に賛成。頭も混乱してるしさ、整理させてよ。」

「私も少し休息をとってからの方がいいと思いますね。」

“休憩派”が一人増えた。十和だ。

「無理は良くありません。小さい子や女性もいますし、休憩してからにしましょう。」

医者なだけあって、十和の言葉には説得力がある。空が赤くなってきたことと双子が眠そうにしていたのもあって、結局朝までここで休んでいくことになった。

「……それで、俺はその大会で優勝したんだぜ！」

「へーん、アタシなんか遠い町からファンがいっぱい来てくれたんだから。」

「へえ、2人とも若いのに凄いですねえ。」

みんな、順応しすぎじゃないの？

緋風と彪砂、十和の三人がそれぞれが元々いた世界の話で盛り上がっている。

双子と神詠は隅でぐっすり眠り、神冥は火に薪をくべている。

そんな“旅の仲間”達についていけず彼らの様子をぼうつと眺める椎香に、羅歌が遠慮がちに近寄ってきた。

「……みなさん、すごいですね。あつという間になじんでいるというか、状況を受け入れられるのが早いです……。」

「本当よね。」

どうやら羅歌も椎香と同じ心境らしい。他にすることのない椎香は、適当に相づちを打つ。

「……ウィルス退治って、どれぐらい期間がかかるんでしょう……。」

「

「さあねえ、見当もつかないわ。」

「…………元の生活に、戻れます、よね。」

ぽつりと呟かれた羅歌のその言葉に、椎香はここへ来て初めて元いた世界のことを思い出した。

東京のマンション…学校、友達……たまり場に使っていた公園、カラオケボックス……そして、引越し先の田舎町、アパート……。現実感がなさ過ぎるからか、それとも“別世界に行きたい”なんて考えていたからか。

戻りたい、という気持ちは彼女の中に沸いてこなかった。

第3話 リンディアにて

「そういえばさ。」

一行が旅のスタート地点から一番近い集落まであと少しでたどり着きそうな昼下がりに、ふいに緋風が口を開いた。

「俺たちが異世界から来た……って、ここの世界の人に言っているのかな。」

第3話 リンディアにて

「なんで？ 別に言ってもいいんじゃない？」

「いろんな人に協力してもらえんじゃん。」

すかさず意見を言ったのは彪砂と神詠。

「でも、そんなの信じてもらえる？」

「そうですね、難しいかもしれませんが。」

椎香は当然のようにわいた疑問を投げかけ、十和も同意する。

「しあんに聞いたらわかるのにねー。」

はあはあ、と息を切らせ必死に歩きながら、瑠々が呟いた。

「本当ですね……。」

「……よんでみる？」

紫杏と雪路は前回、今後王宮都市へ来るまでに用事や困ったことが起こった時は椎香たちの誰かがどちらかを呼べば必ず現れる、と言に残した。

最初のように力を使って遠方の仲間と会話するのは一人だけならあまり力を消費しないから、少しの時間なら困った時に手助け出来る、と。

「でも……呼ぶったって、どうやって？」

「しあんー!!」

「つて、そんなんでもいいのかよ!」

声を揃え口の横に手をあて適当な方向に叫んだ双子に、すかさず神詠が突っ込みを入れる。

「はい、お呼びでしょうか。」

……だが、無事に紫杏を呼び出すことができた。

「申し訳ありません、お伝えするのを忘れておりました。あなた方が異世界から来たことは、なるべく内密でお願いします。」

「いいけど、何でだ？」

「ウィルスを撒き散らす存在が何なのか、私達には全く分かりません。異世界から人が来た、と広まったら、彼らの耳にも入るかもしれない。」

「なるほどね……。」

誰が、何がウイルスを使って碧の宮を混乱させているのかが分からない。紫杏の懸念は全員が納得できた。

「唯一、各集落の長達には私の方から事情を説明していますので、町や村に入ったらその長に必ず会ってください。」

「分かった。」

「ごめんなさい、そろそろ時間なので……また……。」

声が聞き取りづらくなり、同時にジジ……と紫杏の姿にノイズのようなものが入った。

うつりの悪いビデオテープのようだと椎香が思った瞬間、紫杏の姿は完全に消えた。

「じゃあ分かった事だし、いざあそこへ！」

あそこ　森に囲まれた小さな集落へ、九人は入っていった。

「どうもどうも、遠い世界からご苦労様です。ここはリンディア、私は村長のイリアといえます。」

「初めまして。よろしく願い致します。」

紫杏の言ったとおり、一行はまず集落の長を探し、面会へとこぎつけた。十和がイリアに頭を下げ、椎香達五人もそれに倣う。

イリアの部屋はそんなに広くなく、また全員分の椅子もないため、瑠々と露々、神詠、羅歌の四人は同席していない。

「雪路様のおられます王宮都市までは徒歩で1ヶ月以上かかりますし、ウイルス汚染も進んでいます。うちの村は小さいですが宿もあ

りますし食料や薬、狩りに使う武器もあります。必要なものは遠慮なく言ってくださいね。」

「ありがとうございます、助かります。」

「あんた達、見ない顔だね…。どこから来たんだい？」

ひとしきりイリアから話を聞いた後九人は三人ずつの三組に分かれ、今度は村の人から話を聞くことにした。

一人からの情報よりも五人、十人からの情報の方がより多方面から考えることができ、様々なことが分かるという十和の発案で。

「あんた……だと？ 貴様、この私に向かって」

「ち、ちよつと神冥！！」

「すみません、彼今機嫌が悪くて。」

通りすがりの中年女性の何気ない一言に怒りをあらわにしそうになった神冥を、慌てて椎香と十和が誤魔化す。

椎香達に対してもそうだが、神冥は元の世界で王の座についているだけあって常に他者より自分が偉い、という前提の上から目線。

「ちよつと！」

十和が女性に説明し話を聞く間（椎香達は王宮都市の人間で、各地でウイルスの研究をしている、ということになっている）、小声で椎香は神冥に注意する。

「……何だ。」

（ああ、本当に不機嫌だ。もう嫌だ、この人。）

「さっきも言っただじゃない。あなたが王様なのは、あなたの世界の話でしょ！」

「……うむ。」

「ウイルス退治はこの世界の人に協力してもらわないといけないんだから、嫌な印象植え付けないでよ。“あいつ嫌な奴”って思われたら協力してもらいにくくなるでしょ？」

「全く、何故私がこのような事を……。」

“何故私”。それは、椎香もおそらく他のメンバーも、ずっと考えていること。

“小説みたいに異世界にトリップしたい”という、数日前の無責任な自分の意思をふと思い出した。

「仕方のない。早く片付けて戻るためだ、我慢してやろう。」

まだ不満は残っているようだが、とりあえず神冥も嫌々納得したらしい。

「どうもありがとうございました。」

「いえいえ。大変だろうけど頑張るんだよ。」

話が終わったらしく十和が礼をし、女性が手を振って去っていった。

「二人とも、ウイルスの事が少し分かりましたよ。」
「どんな？」

「リンディア周辺での被害は農作物を荒らす、力の弱い子供やお年寄りに怪我をさせる等ですね。この辺りしか生息していない“ラッシャ”という動物に感染しているそうです。」

「ラッシャとはどのような見た目なのだ？」

「白くて耳が長い、普通は温厚な動物だそうです。」

白くて耳が長い、温厚な動物　椎香はウサギを思い浮かべたが、人間に襲い掛かる姿まではどうも想像できない。

「あー、いた！」

「とわー、しいかー、しんめー！」

「緋凧と彪砂が、作戦会議するってよー！」

瑠々、露々、神詠という子供トリオの大きな声が聞こえた。

「みなさんもある程度情報を仕入れたようですね、行きましようか。」

「

……ひょっとしたらこれは全部夢かも、なんてことを椎香はこの世界に来てから何度も思ったが、そんな現実逃避はいよいよ許されなくなってきた。

「みんな逃げろ！　ウイルス汚染されたラッシャが出たぞ！」

作戦会議をしようとした矢先、例のラッシャが現れたリンディアの中心部に現れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7569y/>

碧の宮

2011年11月27日19時45分発行